

# 米国の学生生活

池 宮 正 行

未知のものに対するあこがれは若さのあらわれである。若い方々が、海外旅行や海外留学を夢めているのは当然である。数年前、私は米国南部のニューオリンズ市で、米人宅に招かれた時、偶々、平安女学院、英文科出身のOさんに会った。彼女は短大を出て会社に勤め給料を貯金し米国までの片道料金の15万円をつくった。そこで彼女は自分の海外旅行の夢を実現する為に、先づロスアンゼルスに渡り、その後約6ヶ月間米国各地を働きながら旅行をし、無事京都に帰ったようである。私はこのような、しっかりした女性が、この学園に育っていることを誇りに思うと共に、前途夢多き平安女性が、このO先輩の如く、未知の世界に勇ましく進める賢明さを身につけてほしいと願っている。

私の欧米での生活は約5年で、思い出も多く何を書いてよいか迷うのであるが、米国の中部にあるネブラスカ大学、カンサス大学（何れも州立で、学生数約1万5千人）での3年間の思い出の中で、日本の学生々活と特に異った事共を書いてみよう。

米国の学生は、9月に秋学期（第一学期）が始り、2月に春学期（第二学期）が始まる。

夏休みは、学年と学年の間にあるわけで、日本のように学期の間にはさまっていない。従って6、7、8月とまる3ヶ月にわたる長い期間にも宿題一つないので、怠け者にとっては天国である。入学は州立大学は、その州出身の学生は、殆んど全部（一部分の劣等生を除き）入学出来る。他州又は外国からの留学生には、簡単な入試テストの行われることもある。入学の手続きは、学期の始めに、自分の選択課目やコースを各科の先生方と

個人的に相談し、各種の用紙に記入し、最後に決心がついたら、入学金、月謝その他を支払い、学生証に PAID (支払済み) のスタンプを押して貰って目出たく一年生 (fresh-man) になるわけである。しかし一学期たつと、その中の何割かは学業成績不良、将来見込みなしとして、退学させられる。日本では、入学の前に、或いは合格発表と同時に月謝や入学金を支払わせ事情の如何を問わず返してくれないが、米国の大学では入学後といえども、退学したい人には納入金を返してくれる。但し入学後の経過日数が長くなると返済してくれる額は少くなる。学校が始まってから、ある講義がどうもよく理解出来ず、合格点がとれそうもないと思ったら1ヶ月以内に、課目の履修を取消したらよい。開講当時は教室一杯にいた受講生が、1ヶ月後に半分以下に減ることもある。先生の講義に魅力がないのもその理由の一つである。講義は日本のようなマスプロ教育は見られない。先生方の態度は日本よりもきびしく、休講は私のいた3年間に全部で数回だけであった。ある教授は、風邪をひいていたが、風邪薬をのんで、鼻紙の束を机の上におき、鼻をかみながら2時間講義をし、机上は鼻をかんだ紙で一杯になった。日本では、私用の為に休講にする先生方も多いが、全く情けないことである。

日本では、講義の始めと終りには、先生と生徒がおじぎをして挨拶をするが、外国では頭をさげる挨拶がないので、先生はいきなり講義を始め、終わったら挨拶なしでさっさとひきあげる。教授の中には、学生の机に腰をかけて講義したりして、始めの間は、不作法に思われたが、反って親しみがもてるようになった。米国の先生は試験を度々する。先生によっては、殆んど毎時間講義の前か後に簡単な試験をするものもいる。約5分間位で書きあげるテストである。これを我々は俗にショットガン (Shotgun) と云った。学期の途中での1時間位の試験がテスト、学期末試験の2時間の本試験がイグザム (examination) と呼ばれていた。兎に角、テスト、イグザム、レポート等と仲々勉強が忙しい。気をゆるしてノンビリすると落第になり、他人の2倍も在学するようになる。成績が悪いと、いい会社

に就職出来ないから、真面目な学生は週日も休日にも実によく勉強している。私のいたネブラスカ大学の成績の区分は次の通りである。

9点以上	Excellent
8	Superior
7	Very good
6	Above average
5	About average
4	Below average
3	Passing
2	Barely passing
1	Failing
0	Incomplete

日本人留学生は、英語に相当自信のある人でも、入学早々は殆んどがノイローゼになり大学のヘルスセンター（学生保健所）の世話になり、相当ひどい患者は神経科に入院させられて数日間十分に静養させられる。

多忙な勉強の間にも、楽しいのは学内での色々な催しである。例えば我々の文化祭、大学祭の如きが、ホームカミングデー Home-coming dayである。全学の各グループから選出した美女の中から Homecoming Queenを選出したり、学内や寮の開放、市中のパレード、運動会、各グループによる演劇会等がある。

この演劇会は市の公会堂や劇場を借りて入場料をとって行われる。時局風刺劇も評判がよいが、私を感心させたのは、ある女子寮のグループによるラインダンスである。数十人の女子学生が、日劇や国際劇場のダンシングチームのように水着姿で音楽に合わせて美しく踊り、美しい脚で一糸乱れず踊る姿と効果的なライトの輝きは我を忘れしめる程であった。

日本でも戦後は大学主催のダンスパーティーが多いが、私がいたネブラスカ大学の出来事をのべよう。ある秋の夜ハローイン・ダンスパーティーがあった。はなやかな宣伝広告にいわく。このパーティーに女の子をつれて来る

な。酒を飲んで来てはいかん。会場では禁煙。全学の男性よ、今宵青春を共に楽しもうではないか云々。とあったので、私には連れて行ける女子学生もないし、第一ダンスも出来ないが、パートナーなしで行けるのなら、何か面白いことがあるかも知らんと、好奇心にかられてその晩美しく飾られたダンス会場（大講堂）にひとりで定刻前に出かけた。やがて、各カップルが集って来たが、皆奇抜な格好や服装をしている。原始人の格好をして髪ぼうぼうにし、殆んど全裸の一组の男女学生、中世紀風の服装をしたカップル、中国服や日本着物の男女のカップル等日本では想像も出来ない学生のダンスパーティーである。やがて学生のバンドに合わせて皆楽しそうに踊った。後で分ったが、この日だけはダンスパーティーに女の子が男の子をつれて来る習慣との事であった。さて、何回も踊りと休憩を繰り返しているうちに、何だか場内のフンイキが騒がしくなって来た。そしてお巡りさんが2人入って来て場内を巡りやがて一人の青年を連れ出して行った。場内は又、賑やかな踊りが始まった。

皆のダンスを見るのに飽いた私は、ココロ売りのおばはんには話しかけたら彼女いわく「このダンスパーティーにパートナーなしで来ている男が2人いた。その一人はあなたで、他の一人はお巡りさんに捕えられた今の男だ。彼は皆がダンスしている間に、座席に置いてあるハンドバックや上衣のポケットから、財布を抜きとっていたらしい。彼は専門的なスリである」と。ダンスパーティーに、一人で出かけるのはスリ位のものであることをその時始めて教わった。その後度々ダンスパーティーに誘われたが、私はもう二度と行かなかった。

人間、よく学び、よく遊べということは大切な事であると思う。休日に、スポーツ、映画、ドライブやダンスパーティー等を楽しむのは、日本でも日常事であるが、日本では見られない年中行事の面白い騒ぎに **Panty Raid** というのがある。それは、男子寮生が女子寮を襲って女子の **Panty** を奮ってひきあげる遊びである。ある晩行われたこの事件を少し詳しくのべると、某月某日、火曜日の夜11時20分 100人から125人に及ぶ男子学生（そ

のうち気の弱い男は第一線に立たず後方で見物した)は500人もいる女子寮 PutnamHall を計画通り襲った。そのうち約30人は覆面 (masked) をして陣頭に立ち電燈の消えた寮の裏口から侵入，女子学生の着ている Panty は勿論，タンスの引出しの中から Panty や肌着を略奪する。

女子軍も悲鳴やカン声をあげて，これに応戦し，中には消火器で水をかけたり，枕や本を賊に投げて激戦は約5分続いた。覆面のリーダーの吹き鳴らす笛を合図に，男子軍は戦利品をかかえて急いで総退却。彼らが退却して約2分後にパトカーがサイレンを鳴らして，その女子寮に到着し，事情を調べた。その夜のうちに戦利品の Panty や肌着は女子寮の庭木にかけられ，色とりどりの花が一夜にして咲いた感じがした。

扱て，この計画は先づある男子寮の世話役の上級生から，女子寮の寮監に前以て許可を得て，日時を決定する。そこで寮監は全寮生に“今晚何事かおこるかも知れないが，安眠を妨げられたくない人は部屋に鍵をかけておくこと。又，タンスも貴重品も十分注意して管理しておくこと等、を”通達する。寮生は毎年の行事であるからこれが Panty Raid であることを知っているのだから，女子軍の方も防御の作戦をねるのである。従って，年によっては，男子軍が散々な目にあって，戦利品は Panty 数枚ということもあるそうである。私達は戦前，高校（旧制）の寮でストーム（嵐）といって，週末の夜，バン声をはりあげてカラ騒ぎをした。又，最近の京大の寮生は，時々，酔った勢いで，京大の女子寮の庭でバン声をあげて騒ぐこともあるそうだ。日本では，米国の如き Panty Raid は，国民性の違いがあって，行われることはないと思われるが，米国では多くの大学で年中行事として行われていると聞いている。日本人のように物事を深刻に考えない，底抜けに明るい米人の青春を私ほうらやましく思った。

大学生 (undergraduate) に対する育英資金は仲々あたらない。苦学している留学生や，自活している米人学生にとって，アルバイトは，命のつなでもある。学期中は，学業が忙しいので，1日1，2時間のアルバイトしか出来ない。男子なら，建物内の掃除，引越しの手伝い，食堂の皿洗い，

女子なら食堂でラッシュ時のウエイトレス（給仕）や、研究室での器具洗い、図書館の整理係等がある。又、一般の家庭における子守り、これはベビーシッターと呼ばれるが、例えば夫婦で音楽会やパーティーに出かける時、その家の留守番と子供の世話をする事で、学校の勉強をしながら、1時間200円位のお礼が貰える。日本のような小中学生の勉強指導のアルバイトは殆んどないが、期末試験の頃になると、優秀な学生は広告を出して、同じ大学生の勉強を手伝ってあげる。日本なら友情の代価と考えて級友から、礼金をとることは考えられないが、米国では、試験のヤマを教えて1時間2ドルや3ドルとるチャッカリした学生もいる。夏休みのアルバイトは苦学生にとって、1年間の生活を左右するものであるから、学生にとっては必死である。5月末になると、期末試験の最後の課目が終ると一刻を争ってニューヨークやシカゴ等の大都会に出かける。大都会程、仕事の口も、収入のよいのも多いからである。夏休みの3ヶ月の仕事は、食堂のウエイトレスのような簡単な仕事から、高度の技術的な仕事、公認賭バク場でのバクチ打ちの仕事、等種々様々である。競馬場でアルバイトで稼いだ金を、競馬でスツて、無一文で帰って来る学生もあれば、ギャンブルで数千ドル儲けて帰学する学生もある。

学資が切れると、大学で借金する手段もあるが、それは不可能な事が多い。米人学生は、学資が切れると、あっさりと休学し、1、2年勤めて学資を貯めて又復学する例も多い。私のいた大学の事務員や警官の中にも休学中の学生がいることを知って驚いたことがある。女子学生は、在学中に結婚する人も多い。夫婦揃って同じ大学に在学し、嫁さんの学生が、授業をうけている夫の学生の教室の出口で待っている姿は、ほほえましい。結婚している女子学生は、子供が出来て、お腹が大きくなっても、産む前日まで学校を休まない。子供が生まれて数日したら、又出て来て勉強を続けているのを見ると、彼等がたくましい大国民であることを見る思いがする。

米国の大学は、勉学の施設は、日本と比較出来ない位完備して、流石は金持ちの国と感じさせられる。図書館も教室も、寮も暖冷房完備。暑くて

寒くて、外側の騒音とで、勉強もよく出来ない日本の教室とは大違いである。私のいた大学は図書館の蔵書が100万冊近くあり、図書館の書庫に居るだけで、賢くなった気がしたものである。そこで図書を借りて、1～2週間の期限内に返さないと、1日につき25セントの罰金を支払わねばならない。日本式にルーズに考え、図書係から催促されて「どうもすみません」とあやまっても、タダでは済まされないわけである。私もうっかりして、在学中に数ドルの罰金を支払ったが、期限切れの罰金収入が月千ドル以上というから、米国人は余程ノンキなのが多いと思われる。夕食後、図書館で勉強する学生が多い。寮では、友人に邪魔されるからである。勉強に疲れると、近くにある学生会館の地下のリクリエーションセンターに行くと、ボウリングも撞球(たまつき)も出来るし、テレビも見れる。music roomでは、立派なステレオの名曲が聴ける。10時に図書館は閉ざされ、11時には学生会館も門を閉じると、一日の勉学を終えて公園のように広い美しい大学のキャンパスを歩いて帰途につく学生の姿が、水銀灯の下に明るく照らし出される。寮には、まだ多くの部屋に灯がついていて、机に向っている学生の横顔が美しく望まれる。私は、図書館から帰途につく時間が、一日のうちで最も安らぎをおぼえる楽しいものでした。澄んだ夜の空気を吸い乍ら、好学の青年達に幸多かれと祈ったものでした。(41.11.10)